王翀演出『存在と時間２.０』　写真提供：広州大劇院

［中国］

「疫病時代」の中国演劇回顧 ―― 前に進むしかない旅の道のり

奚（シー） 牧涼（ムーリャン）

2019年末から2020年初頭にかけて、中国および世界で新型コロナウイルス感染症が流行して以来、中国の演劇と社会は、今日にいたるまで続く「疫病時代」に突入した。現在（2022年10月）でも、中国は依然として厳しいゼロコロナ政策をとっており、その結果、公演や演劇祭の観客動員率は低下し、延期や中止に陥る例もしばしば見られる。むろん極端な場合、感染の流行した都市が「沈黙の状態」となる状況下では、演劇界の動向は、社会全体が多方面にわたって受けた影響の一つにすぎないだろう。しかし、業界に大きな試練を与えたこの３年間、中国の演劇が何も対策を講じなかったわけではない。感染状況により、防疫対策の方針は時期や地域によって異なっていたため、演劇界にも公演などの機会が与えられる余地はあった。そのため、これまでの一年で、中国演劇はやはり吟味するに

足る実績を残すことができた。それは完璧とは言えないかもしれないが、疫病時代における中国演劇、さらには中国社会の多方面にわたる進展を見事に反映している。

中国演劇界の慣例として、一年の仕事は往々にして旧暦の正月（おおむね新暦の1月か2月）に一旦終了し、短い場合は一週間、長い場合は数週間の正月休みをはさんだのち、新たな一年の仕事が次々と始まる。しかし、もし10月を一年の境界線とするならば、前後の因果関係を明らかにするため、2021年10月以前と2022年9月以降の中国演劇の動向にも、この一年につながるものとして部分的に触れねばならない。地理的に見れば、目下の中国演劇における創作、制作の二大主要都市は、やはり北京と上海である。だが、2022年前半の上海は防疫対策のため長期にわたる沈黙の状態に置かれており、演劇界が活動を休止した期間も長く続いた。また筆者が主に北京に住み、活動しているため、本稿ではこの一年の北京における演劇の動向に重点を置きながら、上海および中国本土のその他の地域にも適宜触れることとする（香港、マカオ、台湾についてはひとまず言及しない）。

中国演劇に詳しい読者であれば、この業界における「体制内演劇」なるものの特別な意味を理解されているだろう。ここで述べる体制内劇団とは、国に従属するものだが、その状況は複雑な様相を呈しており、プロパガンダの傾向を含む「主旋律演劇」を上演することが多いのみならず、ときには実験的な作品や、さらには商業的な作品においても、実績をあげている。

中国におけるあまたの体制内劇団の中で、もっとも名高いのが中国国家話劇院（National Theatre of China、略称「国話（グオホワ）」）と北京人民芸術劇院（Beijing People's Art Theatre、略称「北京人芸（ペイジンレンイー）」）である。2021年12月、国話は創立80周年、正式設立20周年(1)の祝賀を迎えた。国家指導者の習近平は珍しく劇団の芸術家たちに返答し、彼らと演劇界全体に対し、「時代の鼓動をとらえ、人民の立場を守り、正道と革新を堅持し、情熱と活力を携えて中国の物語を伝える」よう希望と指示を表明した。これにともない、この一年、国話は『建国式典の生中継（直播開国大典／Live Broadcast: The Founding Ceremony of PRC）』、『鉄流東進（Iron Army Eastward to Victory）』、『抗戦中の文芸（抗戦中的文芸）』などの主旋律演劇を数多く上演してきた。2020年に演出家の田沁鑫（ティエンチンシン）（Tian Qinxin）が国話の院長に就任したのち、劇団が当局に歩み寄る姿勢を見せるこうした傾向は、ますます顕著になっている。

だが、もう一つの注目すべき変化は、国話がその一方で、劇団の外側にいる、社会における知名度やメディアにおける露出頻度の高いスターを積極的に集め、作品に出演させたり劇団に参加させたりしていることである。それによって国話は、スターと劇団が共に当局に歩

み寄る姿勢を見せ、民間における劇団の影響力をスターが拡大させるという複合効果を生み出している。

しかし、この変化は2022年７月、中国社会で広く注目される話題を引き起こした。同劇団が、中国で知名度の高い新世代スター、易烊千璽（イーヤンチエンシー）（Jackson Yee）の入団を発表した後、ネットユーザーの間で、この決定の「不公平さ」を問う激しい反発が巻き起こったのだ。というのも、現在の中国では、国話のような「体制内部門」は多くの若者が殺到するターゲットとなっている。不安定な経済環境のなかで、こうした就業の機会は、採用者に安定した職の保証をもたらすからだ。そのため、すでに名誉と利益を手にしたスターの易烊千璽が、さらに体制内部門にポストを得ることに、ネットユーザーは不満を持ったのである。この炎上事件は結局、易烊千璽がみずから国話への入団を放棄したことで一段落したが、中国の演劇界および社会全般で、当局の影響力が日増しに強まっている現状を映し出した。

2022年には、「中国のモスクワ芸術座」と称される北京人芸も創立70周年の記念日を迎えた。祝賀期間は北京における感染拡大時期にあたり、ほとんどの活動がオンラインに移行したが、６月12日の創立記念日には、劇団のスター俳優の大半が出演する、北京人芸ひいては中国演劇の名作『茶館（Teahouse）』のライブ中継がおこなわれ、広範にわたる社会の注目を集めた。

予期せぬことに、記念日を前にした６月８日、劇団の芸術功労者であり、2021年の中国共産党創立100周年の際、全国で29人の党員にしか与えられない最高の栄誉「七一勲章」を授与された俳優の藍天野（ランティエンイエ）（Lan Tianye）が、95歳で急逝した。また、記念日のわず

北京人芸『茶館』（６月12日のインターネットライブ中継）　撮影：李春光

か一週間後には、8年間北京人芸の院長を務めた任鳴（Ren Ming）が62歳で世を去った。藍天野は、1958年、『茶館』の初演時に主演をつとめた劇団の歴史の生き証人であり、みずからを「北京人芸の子」と称した任鳴は、院長在任中に劇団の伝統と名誉の継承に尽力してきた。かれらの逝去は哀惜の念に堪えず、また象徴的な意味を帯びている。

その後、北京人芸の院長を引き継いだのは、俳優・演出家の馮遠征（Feng Yuanzheng）である。かれはこれまで劇団の副院長や俳優陣のリーダーとして活躍しており、2021年9月にオープンした北京人芸の新しい劇場「北京国際演劇センター（北京国際戯劇中心／Beijing International Theatre Center）」の柿落としは、劇団の名作レパートリー『日の出（日出／Sunrise）』を馮遠征が演出した新しいバージョンであった。71年目の劇団の歴史を迎えるにあたり、北京人芸は、芸術的遺産と革新、人材管理と発掘という点で、過去と未来のバランスを取ることができるのだろうか。その答えは、やがて示されるだろう。

舞踊の分野では、公的な団体である中国東方演芸集団（China Oriental Performing Arts Group）と故宮博物院などの共同制作による『只此青緑（The Journey of a Legendary Landscape Painting）』が2021年8月に初演され、2022年初頭には中国で多くの視聴者をもつ中央電視台（CCTV）の年越し番組「春節交歓の夕べ（春節聯歓晩会／CCTV Spring Festival Gala）」に登場し、社会全体に一大センセーションを巻き起こ

『只此青緑』　写真提供：中国東方演芸集団／撮影：王徐峰

した。中国古代の著名な絵画『千里江山図巻』をベースにしたこの作品は、流麗さで楽しませるばかりでなく、近年、国民の間で日増しに高まっている中国の歴史や文化への信頼感とも結びついている。その成功は、主旋律作品と商業公演のヒット作を組み合わせることが、現在の中国においてトレンドとなりうることを示している。

民間のプロダクションや商業演劇はいまや、中国演劇界において官制の作品と並ぶ重要な存在となっている。中国でもっとも商業的に発展した都市である上海の演劇界は、2022年前半、長期にわたる中断を経験した。しかし2021年末を振り返ると、上海の演劇全般、とりわけ商業公演は非常に注目すべき水準に達しており、上海が長年にわたって演劇市場を築いてきた成果が出始めていることがわかる。

演劇作品『繁花（Blossoms）』（温方伊［Wen Fangyi］作、馬俊豊［Ma Junfeng］演出）は、上海を描き高い評価を得た、金宇澄による同名の現代小説を脚色、舞台化したものである。2018年の第１シーズンを経て、2021年11月に初演された第２シーズンは、含蓄と余韻に富む傑作となり、多くの観客を動員した。ミュージカル『趙氏孤児（The Orphan of Zhao）』（徐俊［Xu Jun］演出）は、中国の伝統的な物語と中国ミュージカルの美学によって創作され、壮大かつ卓越した水準をそなえていた。中国ミュージカル界の長年にわたる進取の精神の賜物といえるだろう。

また、20世紀末に体制内劇団から国有企業へと組織改革した(2)上海話劇芸術センター（上海話劇芸術中心／Shanghai Dramatic Arts Centre）は、2020年のサスペンス劇『深淵』に続き、2021年末にもサスペンス劇『心の迷宮（心迷宮／Deep in the Heart）』

馬俊豊演出『繁花』第２シーズン　撮影：尹雪峰

徐俊演出『趙氏孤児』　撮影：黄映洲

（何念（ホーニエン）［He Nian］演出）を制作した。同作は、伏線が巧みに絡まり合うプロットを、リアルタイムで撮った映像によるプロジェクション・マッピングと廻り舞台を複雑かつ精緻に組み合わせて上演し、同劇団の高度に専門化された商業演劇制作の水準を実証してみせた。

2021年、上海に新たにあらわれた「亞洲大廈（ヤージョウダーシア）（Yazhou Building）」が話題となった。都心に出現したこのオフィスビルには、16の小規模かつ設備の整ったパフォーマンススペースが入っており、ミュージカル『アポロニア（阿波羅尼亞／Apollonia）』など、さまざまなジャンルの公演を制作、上演している。この場所は「垂直のブロードウェイ」と称され、新しい中国演劇のパイオニアとなった。疫病時代の流れに逆らい、新たな都市型文化、エンターテインメントの発信地を作り出したのである。全体として、新型コロナの感染拡大が上海演劇界に大きな打撃をもたらした事実は否定できない。だが、この時期を十分な蓄積の期間とし、前向きな思考で臨機応変に対応することで、上海の演劇は危機をチャンスに変えることにある程度成功した。中国演劇と世界との交流が凍りついた時期に、中国演劇に適した芸術スタイルと産業モデルを探求し続けることができたのである。

この一年、北京をはじめ全国で、さまざまなプロデューサーが大規模なプロダクションを手がけている。『パラサイト（寄生虫／Parasite）』『フランケンシュタイン（弗蘭肯斯坦）』『皮嚢（No More Than Skins）』『窩頭会館（Wotou Courtyard）』『赤い高粱（紅高粱家族

/Red Sorghum)』などがその例だ。これらの大きなプロジェクトの多くは、従来の劇団単位によるものではない。劇作家、演出家、俳優、プロデューサー、舞台美術スタッフなどは、ほとんどが特定のプロジェクトのために集まり、プロジェクトが終わるまで一緒に仕事をする。こうした産業モデルの流行から、いくつかの共通点が明らかになってきた。その利点は広告上でプロジェクトの売りが明らかなことで、たとえば、広く評価されている小説や演劇の脚本を原作とすることが多い、俳優は映画やドラマのスターが多い、劇作家や演出家は演劇界で有名な人物が多い、さらには一部の体制内劇団がプロジェクトを主導するか、あるいは参加し、資金やキャスト、スタッフなどより多くのリソースを持ち込み、むろん最終的には全国各地での巡演が欠かせない。

課題は、限られた時間のなかで、互いに面識のないメンバーが有機的にまとまるのが容易ではないこと、また、作品のクオリティが、プロジェクトにおいてもっとも発言力のあるメンバーの技量や芸術性に大きく左右されることである。たとえば、北京の鼓楼西劇場(Drum Tower West Theatre)が2022年に製作した大劇場演劇『わたしは潘金蓮じゃない(我不是潘金蓮/I Am Not Madame Bovary)』は、現代中国の著名な作家劉振雲(リウジェシュン)(Liu Zhenyun)の同名小説を脚色したもので、演出は演劇界で人気のある、90年代生まれの丁一滕(ディンイートン)(Ding Yiteng)、主演は映画・テレビ業界のスター張歆芸(ジャンシンイー)(Zhang Xinyi)だ。しかし、最終的なできばえを見る限り、作品は奇妙な様相を呈しており、深みや意味に欠けていた。もうすこし熟慮して磨きをかけていれば、作品の意図を明確に示せたのではないだろうか。

鼓楼西劇場は、じつは近年評判になっている北京の民間小劇場の代表格である。(3) 2014年のオープン以来、北京の旧市街である胡同(フートン)の小劇場で上演する演劇を中心に、プロデュース公演をおこなっている。同劇場は、北京保利劇院(Pory Theater)で上演された、上記の大劇場演劇『わたしは潘金蓮じゃない』のプロデュースに力を注ぐ一方、3作の低予算による小劇場一幕物を上演し、そのうち『ある猿の報告(一只猿的報告/Listen to Your Inner Ape)』と『チェスの話(象棋的故事/The Royal Game)』は、質の高い脚本と演技で観客から熱烈な喝采を浴びた。

疫病時代は、北京を重要な拠点とする中国の演劇界に、二極化した考え方と行動をもたらしたのかもしれない。一つはリソースの集中で、これまでの強力な資本や、当局の組織がより支配的になることである。もう一つは「小さくても美しい」ことへの専念だ。演劇人が比較的熟知した特定の領域に引きこもり、より深く熟成させることである。こうした精神と行為の二極化は、疫病時代の中国社会における普遍的な状況を反映しているかのようだ。すな

わち、一方では、社会階層の固定化以降、努力はこれまでのように目に見える収益をもたらさなくなった。にもかかわらず、努力せざるを得ない状況について、人びとは「内に向かう発展」を意味する社会学用語、「インボルーション（内巻（ネイジュエン））」で形容している。他方、「横になって何もしない、気にしない」という態度を指す「寝そべり主義（躺平（タンピン））」という言葉が、ジョークとして、ネット上で人びとによく用いられている。

こうした環境のなか、疫病時代以前の中国演劇における第三極、すなわち純粋な芸術的探求を志向する実験演劇は、感染拡大期に入って明らかに衰退の兆しを見せている。これについては、実験演劇の舞台となる多くの演劇祭が感染拡大によって縮小、ひいては中断したことが関係している。たとえば2021年に初開催され、業界内外から大きな反響を呼んだ阿那亜戯劇節（Aranya Theatre Festival）は、結局2022年には開催を中止した。同演劇祭の芸術総監督の一人は、2022年に新作『死者たちの七日間（第七天/The Seventh Day）』で、二度目のアヴィニョン演劇祭の「イン（IN）」に選ばれた孟京輝（モンジンフイ）（Meng Jinghui）である。

だが、それ以上に重要なのは、演劇人や観客の側で、実験的な演劇に対する熱意やインスピレーション、参加意欲が低下していることが、衰退の原因である事実だ。もちろん、すでに中堅の域に達した演劇人のなかに、この一年で多少なりとも実験的な新作を発表した演出家もいる。たとえば、王翀（ワンチョン）（Wang Chong）の演出した『存在と時間2.0（存在与時間2.0/SEIN UND ZEIT 2.0）』、李建軍（リージェンジュン）（Li Jianjun）の演出した『あやつり糸の世界（世界旦夕之間/World on a Wire）』、黄盈（ホアンイン）（Huang yin）の演出した『わたしの半生（我這半輩子/Half of My Life）』などだ。『存在と時間2.0』は、これまでに広州で一週間上演されたのみだが、俳優と観客が一対一で向き合うこの作品に、筆者は深く感銘を受けた。ハイデガーの哲学的理論と、子供時代や劇場といった人生の美しい体験が、巧妙かつ知的に統合されており、実験演劇として非常に力強い作品である。

また、2021年の烏鎮戯劇節（Wuzhen Theatre Festival）における「青年演劇人コンクール（青年競演/The Emerging Theatre Artists Competition）」、2022年の国話における「若手演出家創作支援プログラム」、および2021年と2022年の北京国際青年戯劇節（Beijing Fringe Festival）でも、多くの若手、中堅の演劇人のために、新しい実験演劇を発表する舞台が用意された。しかし、全体として、この一年の中国の実験演劇は、驚きと喜びに満ちていたとは言いがたく、せいぜい及第点というところである。ひるがえって、北京大学出身のアーティストによる劇団「話劇九人（THE NINE）」の疫病時代における急成長は、より顕著に時代を象徴している。アマチュアの創作からスタートしたこの劇団は、10年を

かけて、中華民国時代の知識人のライフストーリーや理想の追求を描く演劇の風格を、すこしずつ作り上げていった。その新奇な形式に走ることなく、感動を呼び起こすスタイルによって、今では熱心にかれらを支持する観客層を獲得している。

総じて言えば、中国演劇界にとって、新型コロナウイルス感染症の流行がもたらしたすくなくとも3年におよぶ疫病時代は、決して単なる休止期間ではなかった。時の流れは、その痕跡を残している。中国の疫病時代がいつ終息するのかは予測できないが、終わりを迎える日にたしかなのは、中国の演劇はもはや2019年には戻れないということである。それは前に進むしかない旅の道のりなのだ。

（1） 中国国家話劇院の前身は、1941年に設立された延安青年芸術劇院に遡ることができ、同劇院がのちに中国青年芸術劇院へと発展した。また、1956年には、中央実験話劇院が設立された。2001年12月25日、中国青年芸術劇院と中央実験話劇院は合併し、正式に中国国家話劇院が設立された。そのため、中国国家話劇院の歴史沿革の紹介において、同劇院の創立時期は1941年の延安青年芸術劇院設立に遡り、正式設立は中国青年芸術劇院と中央実験話劇院の合併した2001年であると確定された。

（2） 1995年、上海人民芸術劇院と上海青年話劇団が合併し、上海で唯一となる現代劇（話劇）の国有劇団、上海話劇芸術センターが設立された。その後、国公立の事業体が企業へと転換する全国的な流れのなかで、2009年に上海話劇芸術センター有限会社が設立され、政府が完全に主導する体制内の文化部門から、部分的に政府の資金援助と指導を受けながらも、高度な自主運営と資金調達をおこなう国有企業へと転換された。

（3） 2014年、北京旧市街の胡同にオープンした鼓楼西劇場は、他の上演団体がこの場所を借りることもあるが、劇場の自主プロデュースによる小劇場演劇で、業界における評判を高めた。たとえば、『ピローマン（枕頭人／The Pillowman）』（小劇場版）、『ビューティー・クイーン・オブ・リナーン（麗南山的美人）』および2022年の『ある猿の報告』『チェスの話』などは、良質かつ知的なテイストの商業演劇である。同時に、2018年初演の『一句頂一万句（いっくちょういちまんく）』に始まり、『ピローマン』（大劇場版）、『わたしは潘金蓮じゃない』といった大劇場演劇も、外部の劇場で陸続とプロデュースしている。

Xi, Muliang

演劇評論家。国際演劇評論家協会（International Association of Theatre Critics）中国センター理事。中国現代演劇批評のためのニューメディア・プラットフォーム「観劇審査団（観劇評審団／Drama Jury）」の創設者。中国の著名メディア『三聯生活週刊』『中国新聞週刊』『人民日報』『上海戯劇』『戯劇与影視評論』『北京青年報』『広東芸術』『新劇本』『国家大劇院』などに演劇評論および時評を執筆している。

（翻訳:田村容子）